

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

- 隠蓑羽織り冬野に一人旅 (松本市) 伊藤 和夫
 風雨返り少年の意に背く (長野市) 松本 宏要
 去年今年虚子の蘭志のやうなもの (千曲市) たじまたける
 追儼寺や高倉健をふと見たり (長野市) 白鳥 寛山
 尺雪の肩に重たし一茶墓 (中野市) 中野可菜乃
 春暈の舌もて癒す指のとけ (長野市) 荻原 宏祐
 川中の石に帽子や春の雪 (飯田市) 吉沢 奨
 赤本の残る本棚冬日影 (松本市) 小川 夏央
 鱗削ぐ出刃の刃光る春浅し (佐久市) 吉岡 徹
 四方山の冬芽の色の揺らぎ出す (大森村) 木戸口信幸
 佳作
 左手にタイヤの光り春近し (下諏訪町) 中村 久
 マーラーの妙なる調べ冬つらら (富田村) 金本 牧子

選 評

一句目、隠れ蓑を羽織るとは何やらミステリーを感じる。二人旅となると逃避行なのではあるまいか。冬野という季題がまさに効果的。二句目、この句は破調である。だからこそ風が少年の思い通り

にならず暴れている様子がリアルだ。三句目、この句を読むと虚子の「春風や蘭志いだきて丘に立つ」を連想させる。しかし「去年今年」という季題は的確だ。まさに人生の節目の時であるからこそ。

今井 聖 選

- ウォーキング夫が先行く頬被 (大町市) 原田 勝
 掻くべきか掻かざるべきか雪の嵩 (佐久市) 西田 和彦
 背を揺するジャズレニスト春兆す (坂城町) 柄沢 満則
 餅花を飾つて串を創る母 (松川村) 岡 豊村
 浅刺汁飯屋の壁に裸婦の額 (箕輪町) 向山 政俊
 早春やこともサイズの妻の靴 (辰野町) 赤羽 正久
 春寒や寶銭箱に錠二つ (長野市) 荻原 宏祐
 MRI筒に流るる春の曲 (上田市) 竹内 創造
 鷹の眼にたちろくわれや雪深し (須坂市) 東郷 雄一
 肩甲骨反らし春空へ吠える (神奈川県横浜市) 伊予 素数
 佳作
 朝礼に並ぶ沈黙雪の朝 (塩尻市) 神戸 千寛
 犬ふぐり廻く光集まりて (長野市) 武田 芳子

選 評

一句目、昔はなかった「ウォーキング」という言葉に今はほとんど使われない「頬被」という季語が合わせられている。機知の句と言えよう。二句目、積雪のスピードと鷹のすさまじさに雪掻きを

思案している様子がよく出ている。三句目、背中の動きから季節を思う視点が斬新。四句目、生け花が空間の演出であることを思うとこの母はそういう感覚で餅花を飾っているのかもしれない。

神野 紗希 選

- まあ一度住んでみなされ雪五尺 (長野市) 大島 昇
 締め殺しの木や臘夜のタ・ブROOM (小諸市) 加藤 陽介
 性はいくつもあるよ冬晴れの富士 (下諏訪町) 立石 理
 セーターはチャンキーニット髪を切る (松本市) 伊藤 和夫
 スリッパの先に虚ある春愁 (松本市) 辻 佳代
 垂水打つ少年の影動哭す (中野市) 風間 陽介
 泥足の仔猫の春を連れ帰る (下諏訪町) 木口 碧
 深海にマリンスノーや春近し (下條村) 福岡田 尊子
 沢庵を摘み納屋より春戻る (飯山市) 小野沢 竹次
 病む猫に寄り添ふ猫や春の星 (佐久市) 竹内 勝代
 佳作
 初層かけて散歩を怠らす (安曇野市) 小坂るり子
 父の手に触れた事なし冬椿 (辰野町) 矢島あき子

選 評

一句目、一茶の「是がまあ終の栖か雪五尺」を踏まえ、雪国に暮らす厳しさをにじませた。穏やかな語り口に忍従と矜持が凝る。二句目、古都アンコールの遺跡・ブROOMは、寺院に絡みつく巨大

樹で知られる。締め統ける木と、膨張する猫と…エネルギーが激しく引き合う。三句目、トランプ大統領のトランスジェンダー排除に、俳句で一石を投じた。冬晴れの富士は清らかに多様性を認め輝く。